令和５年度地域づくり人材の養成に関する調査研究会
（第３回）議事概要

〇日時
　令和６年２月２９日（木）１０時００分～１１時３０分
〇会場
　総務省９階９０１会議室
〇出席者
　大杉構成員（座長）、河井構成員※、島田構成員※、吉弘構成員※
　※はオンライン出席
　加留部構成員御意見事前聴取
（事務局）
　椋田企画官、甘利地域支援専門官、山田事務官

【議事次第】
（１） 審議
　① 結果分析
　② 報告書骨子案
（２）その他

【議事概要】

結果分析
〇資料１（結果分析）について、第２回の研究会で各構成員からのご意見を元に作成した資料であり、調査事例を６つの分類に類型化し、それぞれの類型を分かりやすいよう図式化した旨を事務局より説明。

〇資料１について、時間軸の中で捉えることで、個人の成長過程が追いやすくなった。個人の成長過程に対してどのタイミングで行政との関係が始まったか、どの時期に自走に委ねたかを可視化することは参考になる。今回は個人に着目し、どのような経緯で地域活動を行うに至ったかに注目した。状況に応じて行政とは様々な関わりがあり、行政が単に仕組みを作れば、事業を実施すればよいものではないということを発信できればと思う。様々な事例を見て、場づくりが重要である。本資料でも場づくりがどのような経緯で、またタイミングでインプット・アウトプットがなされたか見えるようになるとよい。人事評価に関連し、人材育成の取組はアウトカムが見えづらいが、インプットやアウトプットが契機となり学んだ者が今まさに活躍している事例が多々あり、今回の分析はその評価の視点の一例になるではないか。人材育成の主催者である行政職員にとって、自分たちの取組にやりがいを感じ励みになれば良い。

〇何パターンもあるものを体系的にまとめられており、非常にわかりやすく図形化されている。資料を全国に展開していく上で、どのようなフェーズでそこに至ったかという点も含め、前回の会議時よりも大きくアップデートされており感謝する。

〇体系的かつ興味深い内容になっており図式化もわかりやすい。あえて意見をすると、資料を読んだ結果、行政側が自分たちはどこのパターンに該当し、実際に何をすれば良いのかということが分かるようなガイドラインとして役立つように、よりブラッシュアップされても良いと感じた。一方、資料１のみを見たとき、「処方箋」がないように感じた。例えば何かの病気に対し、どうしてそこに至るのか、どうすれば治るのかに対し、それは皆さんが考えてくださいという形になってしまっていて、総務省が出す報告書としてはもったいない。これらの区分による結果、その区分ごとの取組はこうある、もしくは区分をまたがってこうあると提示することも重要である。また、資料１の中で「OB・OG」という表現があるが、「卒業生」という表現の方が適切であると感じた。

〇調査事例が分類され、分類が理解されていくことは非常に浸透に役立つと感じた。一方、分類で終わってしまい、「So What（だから何なのか）」の部分まで研究会として発信するのが重要だと感じている。まさしく処方箋がないといった意見とも合致する。また、「OB・OG」という表現は「アルムナイ（卒業生、同窓生）」という表現に改めるのが良いと感じる。先輩方の意見、関係性を繋ぎながら、そこをお互いに達成し合うというところで、総務省も「アルムナイ」という表現を使用すると良い形で受け取られると考える。

〇ジェンダーの観点からも「アルムナイ」という言葉を使用することを私も推奨する。「卒業生」といった意味を補足する必要はあるが、地域づくり人材の文脈でもこの言葉を使用することは非常に重要。調査事例の中には、大学の教育関係だけでなく、地域を一旦出た人がまた戻ってくるパターンもあり、そういった文脈でも共通してくくられることではないか。

〇研究会前に事務局と打ち合わせを行った際の資料では、どういったところで地域づくりへの興味を持ったか、拠点作り、多様な参加者、持続性の課題といったポイントが示されていた。資料１では抜け落ちてしまっている部分があるため、その点を加え、処方箋との関連性を可視化するのが良いのではないか。この図に処方箋まで盛り込むと一緒くたになることが懸念されるため、処方箋の部分は報告書本編に委ねた方が見えやすいと考えている。

報告書骨子案

〇資料２の報告書骨子案について、第１章から第３章までは、調査事例の時系列に沿った記述であり、第３章には各地域の調査結果を記載すること、第４章では結果分析として研究会での審

議内容を記載し、第５章では提言という形で第４章から導き出されるポイントをどのように実践するか等を記載したいと考えている旨を事務局より説明。

〇報告書骨子案について、今回の調査結果から導き出すと、事務局案のような形になると考える。見せ方に関しては工夫の余地がある。調査結果の考察で新たな形態での地域づくりに関して７点重要な視点をあげているが、大切なポイントとなる言葉がポイントの中に埋もれてしまっているため「見出し」を頭に付けて示してもらうと分かりやすい。また、これ以外の８点目のポイントとなり得るものもあるかもしれない。繰り返しにはなるが、今回個人に着目し、個人にどう火を付け、途絶えることなく燃えさかるに至ったか。仕組みだけでなく「関わり」が重要であるということを示していただきたい。また、報告書については、公表のみではなく、市町村アカデミー等の各種研修など様々な機会で活用し紹介してもらいたい。

〇事務事業評価の中で人材育成や事業提案がテーマのものは、単発・単年度の事業評価では、その後の成長・活躍・成果まで確認出来ないため、例えば総合計画の検証のような機会に「10 年後評価」で追いかけていくことも考えられる。

〇報告書骨子案について、非常によく網羅されている。見せ方及び報告書をどう扱うかという観点ではガイドのように使ってもらった方が良いと感じる。報告書を読み、即座にポイントと熟読すべきポイントが明確になるようキーワードを先に提示したり、太字にする等の工夫があるとさらに良い。また、個人にフォーカスした結果、結果に繋げることのできる個人の特性や共通点が洗い出され、こういった育成をしていくと良いかもしれないというところまで可視化されると個人が地域づくりを行うということに関して理解が進むと考える。

〇地域づくり活動にどのように参画したかという点については、最終的には「人」だと感じているが、７つのポイントは、これまで明文化されていなかった、どういったアプローチをするのが良いかというポイントがまとめられていることで地域づくり活動に参画しやすくなると感じる。また、外部人材に係わる「繋ぎ手の部分」は改めて重要であると感じた。

〇「個人」について重要な点として、Journey（成長過程）におけるティッピングポイント（変節点）がある。ティッピングポイントになりそうな時に、こういうリソースを注入する、イネーブラー（要因）を入れるといった発想を取り入れると非常に報告書が使いやすくなる。時期を誤ると気がついたときには挫折してたという事態も想定されるため、成長過程のどの時点で行政や地域から「元気玉」やイネーブラーが入ったかをまとめることが望ましい。

〇他委員ご指摘のティッピングポイントについて、団体と個人がまだ一緒くたになっているところもあるが、切り分けて記述することも容易ではない。事前の検討資料に記載されている地域づくりへの興味、能動的、拠点づくり、多様な参加者、持続性の課題といった点がおおよそポ

イントになると考えている。これを各調査事例の中で位置付けし、横並びの中で整理し直した際にどういったことが言及できるか示してはどうかと考えている。また、資料１のポイントと他委員から頂戴した７つのポイントがかみ合っているか、処方箋を記述するにあたり、報告書としてどこまでやるのかというのは検討しなければならない。

〇報告書の方向性としては他委員ご指摘のとおりで良いと考える。どこで多様な参加者を作っていくか、持続性の課題が発生したときにどうするのかを踏まえ報告書が書かれるとさらに良いと感じている。

〇事前に検討していたえぞ財団についての資料では様々な要素が入っており、プレーヤーとしてはその時間的な流れが記載されているが、他の部分が必ずしも時間軸とは関係の無いロジックで成り立っていた。また、情報過多になっていたため時間軸のみで整理した資料が資料１である。両方を使用するか片方に寄せるか他委員の御意見を伺いたい。

〇両方の資料を使用することが良いと考える。最初に大きな方向性として資料１の時間軸で分析したポンチ絵があり、１枚めくるとさらに事例を分析した図がある。これだけでは分かりにくいと思えば報告書に文書として記載されている。こういった三段構えの構成が良いと考える。

〇「人の流れ」は必要。人にどのように影響を与えるかというのは一緒くたに示すと一見分かりにくいが、丁寧に読み解くと関与の仕方や流れが非常に的確である。一枚物のポンチ絵で概要を示しそれを読み解くガイドとして報告書の本文があるという考え方が良いのではないか。

〇地域自体の特徴を最初に掲げるような構成も考えられる。ポイント１点目の「年代や職種、地域等を超えた多様な人たちとの関わり」であるが、こういったものが出てくるための行政の関与の仕方、個人の役割、団体の運営面が論じられるとマニュアルまではいかずとも、自治体の職員が実践に結びつけられるような参考資料になると考える。

〇地域づくりにおいてよく使用される「中核人材」という言葉がこの報告書でも使用されているが何か定義はあるか。

→「中核人材」という言葉は、報告書骨子案に記載しており、各地域団体で中核を担う者という意味で扱っている。今回の調査を実施するにあたり、調査票の中で「中核を担う者の状況」として使用している旨事務局より説明。

〇研究者はどうしても定義を気にするところ、読者がイメージする中核人材が、従来の誰かが先頭に立ってリーダーシップを発揮する場面や形だけ団体の長になる人材像ではなく、実践の部分で中心的に動いてくれる人を想定するようになるということが言葉の定義以上に重要だと考

える。実はそういう人物の方が重要であり、研究会として焦点を当てているということを正しく伝えられるようにしていただきたい。

〇今後のスケジュールについて事務局より説明。

以上